



# 豊澤富助

## 芸の軌跡

文／富岡泰（演劇評論家）

「三味線部への久々の新人です。」  
これは昭和47年4月、大阪・朝日座における文楽公演のプログラムに、「新技芸員」として野澤勝司（現・豊澤富助）と鶴澤清友の二人が紹介されたときの記事の一節です。この部分だけ取り上げるとありますが、この二人の新人が誕生する前は、昭和35



© 堀田力丸

2022年2月27日 紀尾井たっぶり名曲公演より

当代の名人の至芸をきく会シリーズを6年ぶりに開催します。文楽三味線方をけん引する豊澤富助さんが昨年2月に挑戦した「伊賀越道中双六 八段目 岡崎の段」（紀尾井たっぶり名曲4）に続き、義太夫の大曲で、上演機会が少なく稀曲とされる「仮名手本忠臣蔵 九段目 山科閑居の段」を演奏します。



◎ 堀田力丸

左から竹本千歳太夫、豊澤富助

年3月二世野澤勝太郎師の甥・勝之輔が入門したのを最後に、十二年間新人はまったく現れず、また文楽全体でも三味線弾きの数は十八名しかいなかったことを念頭に置くと、この記事は途端に重みを持って響きます。深刻な人手不足、後継者不足に頭を悩ませていた関係者が、新人が生まれたことの嬉しさと期待から、思わず「久々の」と口走ったように思われなくなりません。

もともと、人数は少なくても当時の三味線部の陣容は、まさにきら星の如く豪華なものでした。六世鶴澤寛治と二世野澤喜左衛門の二長老を筆頭に、切れ味の鋭い撥捌きと知的な表現をあわせ持った十世竹澤弥七、富助さんが弟子入りした豪腕という言葉が形を持ったような力強

い勝太郎、深味のある美音を響かせた九世野澤吉兵衛、余韻に詩情を滲ませる五世鶴澤燕三といった諸名人に囲まれ、富助さん、清友さん、翌48年に入門した鶴澤清介さんたちの修業は始まりました。富助さんは実父の豊澤瑩緑師も竹本の人間国宝五世竹本雛太夫の相三味線を勤めた名手でしたから、幼少期から太棹の音色に包まれて育ったようなものでした。

勿論、環境がよければ一人前になれるほど、芸の世界は甘くありません。一見、順風満帆続きのような富助さんの芸歴ですが、内弟子三年目に勝太郎師匠が倒れ、また前述したように三味線陣は人数が少なかったため、早くから破格の役がついて、その稽古に苦労した時期もあったようです。しかし、大先輩たちと弾くことを「舞台を勤めながら勉強させていたのだ」と受け止め、「私は本当に恵まれていた」と述懐する言葉からは、芸と先人に対する深い尊崇の念、がうかがわれ、そうした謙虚な姿勢が彼の演奏を「折り目正しく」「端正な」ものにしていくのだと思われれます。

昭和59年4月、二十年ぶりに豊澤姓を復活させ五世富助と改名し、燕三師の預かり弟子となります。この公演での配役は五世豊竹呂太夫との「すしや」後半でした。その後も着実に芸格を上げていき、平成元年2月に芸術選奨文部大臣新人賞を受賞。平成8年には呂太夫が創始した「義太夫節」を世界に広める会に参加し、アメリカ公演を行っています。この会は平成13年から「話傳の会」と改称し、竹本千歳太夫とドイツで、「盛綱陣屋」「熊谷陣屋」「岡

崎」など重厚な時代物を素浄瑠璃で演奏し、「日本語の通じない所でどれだけ素浄瑠璃が理解されるか」に挑戦しました。この活動によって平成18年5月に文化庁文化交流使に指名されました。平成26年7月にはスイス・ハンガリー・ポーランドで「俊寛」を演奏(国際交流基金主催、新日鉄住金文化財団(当時)企画・共催)、同年8月には外務大臣表彰を受章しています。

その後も特定の太夫に縛られず、豊竹十九太夫との「丞相名残」、豊竹嶋太夫との「十種香」「河庄」などに万能ぶりを発揮してきました。平成26年9月の「盛綱陣屋」前半以降は、千歳太夫の女房役として固定され、その緻密な語りを持ち前のケレン味のない撥捌きで支えています。千歳太夫は令和4年4月に「切場語り」となり、名実ともに文楽を代表する立場となった二人には、今後大役が続くと思われれます。中でも今回手掛ける「山科閑居」は大物中の大物で、昔から紋下(もんした)は大物の第一人者でなければ語れない場面とされてきた物であり、平成10年12月に豊竹咲太夫・清介が一段勤めています。が、殆どの場合は前後に分けて配役されています。雪の降り積もった家屋の中で交わされる本蔵たちの緊迫したやりとりには格調が漂い、武張ったばかりではなく、女性たちが互いを思いやる心情の描写は細やかで、幕切れで哀切に描かれる夫婦親子の別離にいたるまで、息を抜く所がありません。落雪や尺八の音色を表す三味線の手も聞き所で、この大曲が全段通してどう造形されるか、大いに期待されます。

今回は、私を「きく会」とのありがたい依頼を受けて最初はとても戸惑いました。なぜなら義太夫節は太夫さんと二人で稽古して作っていくので私一人の名前で良いのかを考えました。

次に前回こちらで伊賀越の岡崎を弾かせていただいたこともあり、それに並ぶ演目を考え「太夫、三味線になったからには一生に一度は素浄瑠璃で一段弾きたい物として『山科閑居』を」といつもコンビを組んでいる千歳太夫君に話をしてから、ぜひお願いいたしますとお返事をしました。

7月2日という公演日の設定は大曲を弾かせていただく上で稽古日程が重ならないように、前後の文楽公演から2週間以上離れていることを考えて決定しました。

「山科閑居」は一段の中で気を抜くところがないと言われていますが、冒頭部分、雪がちらちら降っている様子、あるいは笹に積もった粉雪が舞い落ちる表現が特に難しいとされています。なにしろその後の文章が「人の心の奥深き……」ですから。さらに小浪の出、「谷の戸明けて鶯の……」の足取りと音色、書き出したら限りがありません。全部難しい。義太夫節の中でも「日向嶋」「道明寺」以上に最難曲と言われていまして、なんとか歌わずかしくないように演奏できればと思っています。

豊澤富助



## 豊澤富助をきく会

【出演者】  
浄瑠璃：竹本千歳太夫  
三味線：豊澤富助  
聞き手：渡辺 保

7/2  
14:00

【演目】  
「仮名手本忠臣蔵」九段目 山科閑居の段 対談

※公演開催についての最新情報は  
紀尾井ホールウェブサイトをご確認ください。